

# マキシーン・ホン・キングストンの『第五の平和の書』における ベトナム戦争の表象——「ベテラン」の声を拾う

中島涼子

## 序

中国系アメリカ人作家マキシーン・ホン・キングストン (Maxine Hong Kingston) はアジア系アメリカ文学のみならず、現代のアメリカ文学を代表する作家の一人である。批評家、読者に広く受け入れられ高く評価された第一作『チャイナタウンの女武者』(*The Woman Warrior: Memoirs of a Girlhood among Ghosts*, 1976) に加えて、『アメリカの中国人』(*China Men*, 1980)、『トリップマスター・モンキー』(*Tripmaster Monkey: His Fake Book*, 1990) は、ジェンダーやエスニシティ、ポストモダン、多文化主義といった視点から幅広く論じられてきた。しかしながら、これらの作品と比較すると2003年に発表された『第五の平和の書』(*The Fifth Book of Peace*) はこれまで冷遇されてきたと言わざるをえないだろう<sup>1</sup>。

このような状況の理由としては、シャン・テシン (Shan Te-Hsing) が指摘する通り、『第五の平和の書』の複雑な内容構成があるだろう<sup>2</sup>。この作品は、「火」(“FIRE”)、「紙」(“PAPER”)、「水」(“WATER”)、「土」(“EARTH”) という4章から成るが、1、2、4章はノンフィクション、その間3章にフィクションが挟まれる形をとっている。1章ではキングストンが経験した火事の記憶が語られ、2章ではその火事で焼失したテキストを書くに至った経緯が、3章ではその失われたテキストの書き直し版が提示される。そして4章はキングストンが主にベトナム戦争の退役軍人を集め、集団で書くことを実践した記録となっている。このように作品がそれぞれに異なる多くの要素で構成されているために、ジャンル、時制、テーマにおいて一貫性を見出すことが困難だと判断されがち

なのである。このような複雑さを理解する手立てとしてニコル・マクダニエル (Nicole McDaniel) は、キャシー・カルース (Cathy Caruth) が *Unclaimed Experience : Trauma, Narrative, and History* で展開しているトラウマ理論の採用を提案した上で、『第五の平和の書』が多様なトラウマ体験を示す作品であると指摘している。

[...] this memoir [*The Fifth Book of Peace*]’s movement between genres, continents, time periods, and subject matters manifests the traumas Kingston and the veterans experienced. The unconventional and alinear form of the text allows Kingston-as-writer to structure multiple traumatic experiences while proposing new possibilities for memoir and life narrative. (62)

マクダニエルが指摘するように、キングストンのテキストにおいてトラウマを保持する者の声が引き出され、個々のトラウマが明らかになり、多層的なトラウマ語りの場が生成されているとすれば、それは、アメリカにおける従来のベトナム戦争の語られ方とは異なる手法といえるだろう。

阿部博子は「外傷性記憶としてのベトナム戦争」において、ベトナム帰還兵の個別的で雑多な症候が集団的なものとして統合され、「ポスト・ベトナム・シンドローム」という名称が与えられた経緯を分析している。この名称が解釈の枠組みとして機能することで、罪悪感、怒り、残虐化、自己疎外といった集団的の症候がますます顕在化したという(7)。結果としてベトナム帰還兵の個別的な経験を語る声は抑圧され、さらには『7月4日に生まれて』(*Born on the Fourth of July*, 1989) や『天と地』(*Heaven & Earth*, 1993) などハリウッド映画の描写により、精神を病んだ自己抑制の効かない男性という帰還兵のステレオタイプが強化されてきたのではないか。

文学作品においても同様の傾向がみられる。アメリカでのベトナム戦争に関する語りは、長らく白人男性が独占する状態にあった。それは、ベトナム戦争を語る際に「経験」が重視され、ベトナムの地に身を置い

マキシーン・ホン・キングストンの『第五の平和の書』におけるベトナム戦争の表象た者のみに、語る資格が付与されてきたためである。レニー・クリストファー (Renny Christopher) は *The Viet Nam War The American War* において、フィリップ・カプート (Philip Caputo)、ティム・オブライエン (Tim O'Brien)、マイケル・ハー (Michael Herr) といった白人男性の作品がキャンオン化する一方で、女性や他人種の声は忘却されていったと述べている (10)。

実際に、これら白人男性の作品をみても、誰が「ベトナム」について語るのかという問題、そして語りと「経験」の強固な結びつきが明らかになってくる。オブライエンの『本当の戦争の話をしよう』 (*The Things They Carried*, 1990) を例に挙げると、まずこの作品にはベトナム人の姿は明示されず、影や死体として登場するのみである。次に女性登場人物に注目してみると、第一章「兵士たちの荷物」 (“The Things They Carried”) に登場するマーサはあたかも戦争とは無関係の生活を送っているかのように描写される。「ソン・チャボンの恋人」 (“Sweetheart of the Song Tra Bong”) のメアリ・アンはベトナムに到来し、奇妙な形で戦争に巻き込まれるが、結局は行方知れずになってしまう。このように、この作品においては「戦争の話」をするための声は白人男性に特権的に与えられているかのようなのである。

エリック・シュローダー (Eric James Schroeder) は、“Vietnam Vietnam Vietnam, we’ve all been there” (260) と結ばれる、ハーの『ディスパッチズ—ヴェトナム特電』 (*Dispatches*, 1977) から着想を得、自身の対談集を *Vietnam, We’ve All Been There* と名付けている。そこに収められた対談相手 11 名<sup>3</sup>のうち、9 名が白人男性であることが示唆するように、アメリカにおけるベトナム戦争の語りは、長い間排他的、限定的なものであったといえるだろう<sup>4</sup>。その結果、そこに蓄積する過去はトリン・ミンハ (Trinh T. Minh-ha) が指摘するような「大文字の歴史」となり、こぼれ落ちた「小文字の歴史」は忘れ去られてきたのではないか。

以上のこととキングストンの『第五の平和の書』を関連付けて考えると、女性で、中国系で、ベトナム戦争時アメリカにいたキングストンは、その戦争について語る資格を有しないということになる。『第五の平和の書』の受容が進まなかった背景には、作品自体の複雑さに加え

て、このような状況が存在したのではないだろうか。そこで、本稿では、『第五の平和の書』をベトナム戦争のトラウマ的体験が語られる作品と位置付けて、キングストンが引き出した「ベテラン」<sup>5</sup>の声及び多様なベトナム戦争の記憶のあり方、その意味を検証したい。

## 1. 『第五の平和の書』

まずここでは、『第五の平和の書』を構成する4章の内容を確認しつつ、それらがいかに有機的に結びついているかを確認したい。

第1章「火」は1991年の“The Berkeley-Oakland fire”をめぐるキングストンの喪失とトラウマ語りの章となっている。彼女はこの章の冒頭で、火事により自宅はもちろんのこと、書きためていた原稿をも失った上に、その直前にも父の死という大きな喪失体験を経ていることを明らかにする。彼女は二つの喪失体験を結びつけて、火事を、父親の葬儀に対する不服と怒りを示すものとして受け止める。また、1991年といえば、湾岸戦争でアメリカ軍がイラクへの空爆を繰り返した年であった。この空爆により多数の犠牲者が出たことから、この火事はイラクの惨状をアメリカ人に示すためのものであるとも結論付けられている。

失意のキングストンは、母と語り合う中で、父親に関するトラウマを軽減していく。母は娘とは正反対の視点から父と火事の関係をとらえていたのだ。“Your BaBa saved you!” (24) と母は主張する。母は、葬儀に出席させるために娘を自宅から遠ざけ、彼女が火事の犠牲者となることを父が回避したというのである。この意見を受け入れて、キングストンも “[...] that’s the right way of seeing my father” (24) と、自身の考えを改める。

このように、第1章は著者の個人的な体験を語りながら、「喪失」、「戦争」、「トラウマ」、「回復」という、作品全体を貫くテーマを提示している。

第2章「紙」は失われた平和の書、“Three Lost Books of Peace”の探求の章となっている。これは、過去の中国に存在しながら、秦の始皇帝や文化大革命などによる焚書の行為によって失われた「平和の書」を指し、キングストンは、中国へと赴く者にこれらの書物を探すよう依頼す

マキシーン・ホン・キングストンの『第五の平和の書』におけるベトナム戦争の表象  
る。しかしながら手掛かりは得られず、結局はキングストン自身が北京  
を訪れた際に、ある人物から次のように助言されることになる。“You  
yourself imagined Books of Peace. And since you made them up, you are free  
to write about whatever you like. You write them yourself.” (52) このような  
経緯で書かれたのが彼女の「第四の平和の書」(“The Fourth Book of  
Peace”、61) だが、これも焚書で焼却された「平和の書」同様、火事で  
失われることになる。その内容を、著者は次の通り回想している。“The  
Fourth Book of Peace [...] was fiction. I was making up characters who use  
peace tactics. It had to be fiction, because Peace has to be supposed, imagined,  
divined, dreamed.” (61) 作家にとって、自身の原稿の焼失はトラウマ的体  
験と言えるだろう。それを経て『第五の平和の書』を上梓したキングス  
トンは、ここでもひとつのトラウマを克服していると考えられるのでは  
ないか。

第3章「水」は『トリップマスター・モンキー』の続編であり、アメ  
リカ本土を離れてハワイに移住したウィットマン・ア・シン (Wittman  
Ah Shing) 一家の生活が描かれる。やがて彼らはベトナム戦争の反戦運  
動に関わることになるが、そもそも移住の動機もベトナム戦争と徴兵を  
避けることにあった。また、この章はウィットマンの息子マリオ  
(Mario) が “I’m not interested in joining the military” (237) と告げ、両親が  
安堵する場面で結ばれており、キングストンの平和主義者としての立場  
が反映されている。

火事で焼失したテキストの書き直しに当たる「水」の章は、一度は失  
われたキングストンの声の再現であり、彼女がトラウマ的瞬間に拘束さ  
れていないことを示す。また、火事という「現実」の脅威に直面しても  
なお、フィクションの力を信じるキングストンの信念がこの章に表れて  
いるのではないか。

第4章「土」は、第2章で「平和の書」の再構築には集団で書くこと  
が必要であると宣言した著者が、実際に「サンガ」(sangha) の中心とな  
って、書くことを実践した記録である<sup>9</sup>。「サンガ」はサンスクリット語  
で「集団」、「仲間」を意味する言葉であり、キングストン自身は本文に  
おいて以下のように定義している。

The Buddhist word for the community that lives in peace and harmony is “sangha.” To live happily, wholly, truly, each of us has to create sangha. The sangha is the place — the sangha is the people with whom you can exchange feelings and thoughts. The sangha inspires you, and keeps you thriving, and makes life worth living. (364)

キングストンの「サンガ」においては参加者全員が書き手であり聴き手でもある。集団で書き、読み、聴く行為の繰り返しの中で、トラウマに封入された声が次第に解放されていく様子がテキストには表れている。

その内容の詳細は次節で述べることにして、ここでは第4章の結びで明らかにされるキングストンのさらなる喪失に触れておきたい。それは、母 (MaMa、Brave Orchid) の死である。父、母、家という、自己のアイデンティティをも揺るがしかねない存在の喪失は、ベトナム戦争により精神的な傷を負った人々とキングストンを結びつけたであろう。そして、シャンが “the book demonstrates the author’s resilience in the face of catastrophe and her ability to produce a new and higher order” (15) と指摘する通り、「サンガ」での活動を通して回復したのはベテランのみではなかったのだ。

以上のように、一見断片的に見える各章はそれぞれが喪失、戦争で負ったトラウマ的体験から声を発するためのテキストとなっている。1章では家、父、書の喪失に触れ、2章と3章でその喪失体験に囚われていないことを示したキングストンは、「サンガ」において「ベテラン」のトラウマを变形させ、彼らの声を解放していく。その過程が描かれる4章に次節では注目し、「ベテラン」の声が、彼女の筆を経由してどのように多声的なテキストとなっていくのか検証したい。

## 2. 「ベテラン」の声を聴く

著者は章の導入部で、「ベテラン」との接触の始まりを次のように述べている。

マキシーン・ホン・キングストンの『第五の平和の書』におけるベトナム戦争の表象

Because I asked everywhere for Books of Peace, and I told everyone that I had lost the one I was writing, veterans of war began sending me their stories. (242)

「平和の書」への反応として戦争帰還兵から手紙が送られてきたという事実の裏には、「戦争」と「平和」が対極に位置するものでありながら表裏一体でもあるという二律背反的な考えが存在するかもしれない。

続いてテキストでは、ある匿名の者から、戦争帰還兵にとって「女性に報告すること」が、いかに必要であるかという内容の手紙が送付されてきたことが明らかになる。これに対するキングストンの反応に、戦争に参加すること、「経験」することへの彼女の意見が表明されている。

Yes, women are sanctuary; women bring soldiers home. But also women need to hear the war stories. “Native Americans consider war an altered state for which warriors were prepared with ceremony, and from which warriors were welcomed back with ceremony. In this way the entire community (woman, children, old people, the ill and handicapped) participated in the war. They shared the risk and responsibility, the suffering and loss, the victory or defeat, and then went ‘home’ together. (247-248)

ここで著者は、戦争は男が「経験」し、その物語を女が聞くもの、という構図を覆している。女性は能動的に聴くことで参戦し、兵士を「ホーム」へ導く役割を担っている、また、コミュニティ全体が戦争への責任を持つという意味では、全員が戦争の「経験」者であるというのだ。

「土」の章は「ホーム」から「ホーム」へという円環構造をとっているが、誰もが戦争の「経験」者であるという考え方は、円環構造のもう一端、章の結末部分に挿入されたキングストン自身のテキストにも如実に表れている<sup>7</sup>。ここで彼女は『チャイナタウンの女武者』、「白虎」(“White Tiger”)の章で用いた「花木蘭」の伝説を再び書きかえている。

Our general was a woman. A beautiful woman.

A woman led us through the war.  
A woman has led us home.  
Fa Mook Lan disbands the army.  
Return home. Farewell. (392)

ここでは、ゲイル佐藤 (Gayle Sato) も指摘する通り、女戦士の戦闘的側面よりも、兵士を「ホーム」へと導く平和的な面が強調されている(117)。これは、「ホーム」から出て「ホーム」へと戻るといふ、日常的に繰り返される動きを断ち切られたベテランたちを、「サンガ」での活動を通して「ホーム」へ導こうという著者の意図を明示するものである。

それでは次に、「サンガ」にはどのような人物が集まったのか、見ていきたい。第一回の開催日に集結したメンバーを確認すると、実際にベトナムの地に赴いた男性の帰還兵に加えて、元従軍看護婦のリリー・アダムス (Lily Adams)、日系アメリカ人作家のジーン・ワカツキ・ヒューストン (Jeanne Wakatsuki Houston)、本稿の序において先行研究として名を挙げたクリストファーと、様々な性別、人種、経歴の者が参加していることがわかる。

瞑想、書くこと、沈黙を通して、断片化したトラウマ的体験を物語り、自己の再生を図るといふ目的のもと、「サンガ」のメンバーはアメリカ各地から集散するが、回を重ねる度に顔ぶれが変わり、語られる内容も変化していく。同一の人物が複数回参加するとすれば、その度にその人物の語りが変化することをキングストンは求める。

Each time you rewrite, you're going back into the tunnel, and bringing more knowledge out. [ . . . ] You will return to the core event, and you will return home a different person. The story changes, and you change. And history changes too, Viet Nam changes. (327)

書き直しの過程で個人の記憶を変化させ、抑圧された声を引き出そうというのがキングストンの目論見であり、それはベトナム戦争の記憶、



マキシーン・ホン・キングストンの『第五の平和の書』におけるベトナム戦争の表象語られ方をも変化させることを企図している。

このようにして記述されたテキストの中には、従来のベトナム戦争の語りには見られない内容も存在する。その一つが「ベトナム戦没者記念碑」、「壁」(The Wall) に名のない人々への思いである。あるとき、女性の集団がワークショップに参加して以下のように訴える。

“You didn’t know, did you?” [. . .] “that sixty-three women were killed in the line of duty in Viet Nam? And their names are not on the Wall. The Doughnut Dolly who was killed holding a baby — her name is not on the Wall. The Doughnut Dolly raped almost to death by a GI — she killed herself — her name is not on the Wall. [. . .]” (317)

著者は彼女たちの存在感が母のそれに通じると察知し、“I fear them. I have fear-of-women. Woman Warriors. They speak like my mother” (317) と密かに述べるが、この告白には『チャイナタウンの女武者』第1章で不義の子を出産し自殺したおば、「名のない女」と「壁」に名の残らなかった女性たちを並列し、その声を相乗的に拡大する効果があるのではないだろうか。

また、いわゆる「ベトコン」(VC) と称された人々についても、正体の見えない残虐な存在というステレオタイプを覆す描かれ方がなされている。「サンガ」において、ある人物は自分が殺害した「ベトコン」への思いを綴っている。

Over and over I replayed the scene of the VC I had killed alongside our boat. He had been trying to surrender and was unarmed and helpless. [. . .] I envisioned the bullets splashing up to him, hitting his chest, and saw his head rocking back sharply. I had killed my first human being. (341)

アメリカにおけるベトナム戦争の語られ方の特徴として、自らを犠牲者の立場におき、加害性を忘却しつつ語るという傾向がある。この源には、「ポスト・ベトナム・シンドローム」という症候名が確立される過

程で、加害行為に対する罪悪感が、仲間の死にもかかわらず生き残ったことへの罪悪感へと横滑りしていることがあると阿部は指摘している(8)。

ここで再びオブライエンのテキストをとり上げると、彼の作品からもそのような「横滑り」を読み取ることが可能であろう。『本当の戦争の話しよう』の「私が殺した男」(“The Man I Killed”)という章では、語り手ティムが殺害した「ベトコン」の死の瞬間がフラッシュバックとして扱われ、並行するように同僚カイオワの“Just forget that crud”(120)という忠告が繰り返される。一方で、「兵士たちの荷物」(“The Things They Carried”)でも、仲間のラヴェンダーの死が同様にフラッシュバック的に用いられているが、こちらは所属する部隊のクロス中尉に“He would accept the blame for what happened to Ted Lavender”(24)と決断させることで章が結ばれている。このように、オブライエンのテキストでは、死の扱われ方において「ベトコン」とアメリカ兵とでは大きな差が生じていることがわかる。前者は「忘れるべき事柄」とされる一方で、後者は「生涯責任を負うべきもの」とされている。言い換えれば、「ベトコン」の死はトラウマの素因には値しないが、仲間の死は値するということになるだろうか。

しかしながら、キングストンのテキストにおいては、「ベトコン」も“human being”(341)として扱われ、その死に関わった罪の意識が「横滑り」することなく吐露されている。さらには、ベトナム側の人物をも「サンガ」に招き、象徴的な和解の場面が用意されている。その一人レ・ミン・クエ(Le Minh Khue)は*The Other Side of Heaven: Postwar Fiction by Vietnamese and American Writers*(1995)の著者の一人で、ベトナム戦争時にはベトナム人民軍(People' Army of Viet Nam)に属した人物である。「サンガ」のメンバーは彼女を好意的に迎え、戦争の終結後に出会えたことを喜び、手を取り合う。

They [veterans] clasped her against their heart. O, precious being, alive, unharmed. [. . .] Thank God. You're here, alive. I did not kill you. [. . .] They had not seen the enemy; the VC had been invisible, hidden in the

マキシーン・ホン・キングストンの『第五の平和の書』におけるベトナム戦争の表象

dark, in the jungle. She had been the enemy — this lovely, lovely woman.  
(358)

この邂逅は「ベトコン」という呼称が覆い隠していた人間性を明らかにし、彼らの声に耳を澄ませることの必要性を示唆しているのではないだろうか。

### 結論

以上見てきたように、『第五の平和の書』には、著者をはじめ「ベテラン」たちの様々なトラウマ的瞬間が刻まれている。それは、どのような形であれベトナム戦争に関わった者の「経験」の多様性を示し、その戦いの記憶がアメリカの白人男性の占有物ではないことを証明している。オブライエンらのテキストでは排除されたベトナム側や女性の声を重要視したキングストンは、その声を自らのテキストに織り込み、より多声的な「ベトナム」の記録を提示したといえるだろう。「小文字の歴史」から多様な声を引き出し、「大文字の歴史」をも動かそうという姿勢は、第1作から一貫してキングストンがとり続けてきたものだが、彼女はここでもベトナム戦争の記憶、その語られ方に一石を投じている。

そしてその波紋が広がり続けている証として、『第五の平和の書』出版前後の動きにも触れておきたい。2006年、キングストンの編集により *Veterans of War, Veterans of Peace* が出版された。これは『第五の平和の書』と密接な関係を持つ作品である。というのも、ここにはキングストンのワークショップで書かれた散文と詩が収められているのだ。また、そこに収められた作品のうち、ジョン・マリガン (John Mulligan) やジェームズ・ジャンコ (James Janko) らの著作は独立した作品としても出版されている。この意味においても、キングストンの「サンガ」はアメリカにおけるベトナム戦争の語りに新たな声を挿入するための源泉となったのではないだろうか。

### 引用参考文献

Caruth, Cathy. *Unclaimed Experience: Trauma, Narrative, and History*. Baltimore:

- Johns Hopkins UP, 1996.
- Christopher, Renny. *The Viet Nam War The American War—Images and Representations in Euro-American and Vietnamese Exile Narratives*. Amherst: U of Massachusetts Press, 1995.
- Herr, Michael. *Dispatches*. 1977. New York: Vintage, 1991.
- Kingston, Maxine Hong. *China Men*. New York: Knopf, 1980.
- . *The Fifth Book of Peace*. 2003. New York: Vintage, 2004.
- . *Tripmaster Monkey: His Fake Book*. New York: Vintage, 1990.
- . *Veterans of War, Veterans of Peace*. Kihei: Koa Books, 2006.
- . *The Woman Warrior: Memoirs of a Girlhood among Ghosts*. 1976. New York: Vintage, 1989.
- McDaniel, Nicole. “‘Remaking the World’ One Story at a Time in *The Fifth Book of Peace and Veterans of War, Veterans of Peace*.” *MELUS: Multi-Ethnic Literature of the U.S.* 36.1 (2011): 61-81.
- O’Brien, Tim. *The Things They Carried*. 1990. New York: Mariner, 2009.
- Sato, Gayle K. “Reconfiguring the ‘American Pacific’: Narrative Reenactments of Viet Nam in Maxine Hong Kingston’s *The Fifth Book of Peace*” *The Japanese Journal of American Studies*. 15 (2005): 112-133.
- Schroeder, Eric James. *Vietnam, We’ve All Been There — Interviews with American Writers*. Westport: Praeger, 1992.
- Shan, Te-Hsing. “Life, Writing, and Peace: Reading Maxine Hong Kingston’s *The Fifth Book of Peace*” *The Journal of Transnational American Studies*. 2009. U of California. 29 September 2011 <<http://escholarship.org/uc/item/68t2k01g>>.
- Trinh, T. Minh-ha. *Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism*. Bloomington: Indiana UP, 1989.
- Wong, Sau-ling. “Introduction” *Maxine Hong Kingston’s The Woman Warrior A Casebook*. New York: Oxford UP, 1999.
- 麻生享志『ポストモダンとアメリカ文化—文化の翻訳に向けて』彩流社、2011年。
- 阿部博子「外傷性記憶としてのベトナム戦争—「ポスト・ベトナム・シンドローム」の症候をめぐって—」『国際文化研究』16（2010）：1-15。
- 吉田美津「ヴェトナム系アメリカ文学—ヴェトナム戦争を超えて」『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社、2011年。

## 注

<sup>1</sup> シャンは具体的な数値を挙げて『第五の平和の書』の置かれた状況を説明している。“As of November 2008, there were only three entries on *The Fifth Book of Peace* in the MLA International Bibliography, in sharp contrast to the numbers on *The Woman Warrior* (273 entries), *China Men* (90 entries), and *Tripmaster Monkey* (63 entries). [. . .] In addition, there are very few reviews in newspapers and journals.” (1) また、2011年9月の時点で MLA International Bibliography に登録されたキングストンの作品に関する項目数は以下の通りとなっている。*The Woman Warrior*: 342, *China Men*: 163, and *Tripmaster Monkey*: 67 *The Fifth Book of Peace*: 8。ここから、『第五の平和の書』をめぐる状況は Te-Hsing Shan が “Life, Writing, and Pease: Reading Maxine Hong Kingston’s *The Fifth Book of Peace*” を発表した 2009 年 2 月以来変化していないことが分かる。

<sup>2</sup> シャンは次のように述べている。“One of the main reasons is that critics and reviewers do not know how to cope with this complicated, heterogeneous, and ‘weird’ text, which defies easy categorization.” (1)

<sup>3</sup> シュローダーが対談した 11 人は以下の通り。John Sack、Michael Herr、Wallence Terry、C.D.B. Bryan、Norman Mailer、Robert Stone、Tim O’Brien、Larry Heinemann、Bobbie Ann Mason、Bruce Weigl、David Rabe。

<sup>4</sup> クリストファーは、オブライエンら白人男性による作品のキャノン化を崩すものとして、ベトナム系移民のナラティブをとり上げ、分析している。また、近年ベトナム系 1.5 世の作家たちが輩出し、モニク・トゥルン (Monique Truong) の *The Book of Salt*、ラン・カオ (Lan Cao) の『モンキーブリッジ』 (*Monkey Bridge*, 1997)、アンドリュー・ファム (Andrew Pham) の *Catfish and Mandala: A Two-Wheeled Voyage through the Landscape and Memory of Vietnam* といった作品が注目されている。今後 1.5 世の作家による作品が増える中で、アメリカにおける「ベトナム」表象の多様化が期待できるのではないか。

<sup>5</sup> 一般的に “vetetan” は「退役軍人」、「帰還兵」などと訳されるが、本稿ではベトナム戦争に直接従軍しなかった人々をも含むことを目的に、キングストンのテキストにおける “vetetan” を「ベテラン」と表記する。

<sup>6</sup> キングストンは第 2 章において、集団で書くことを選んだ理由を以下ののように述べている。“The garret where I wrote [. . .] burned. A sign. I do not want the aloneness of the writer’s life. No more solitary. I need a community of like minds. *The Book of Peace*, to be reconstructed, needs community.” (62)

<sup>7</sup> 各章の表題の下には、毛筆で円が描かれている。この円は「輪」、「和」を表し、第四章、さらには父の死で始まり母の死で終わるという作品全体の円環構造を象徴するものととらえたい。